実り豊かな生活文化都市

広報
ちゅうおう

2021（令和３年）
10
No.188

没後８００年
武将「浅利与一」

特集　甲斐の国の伝説 弓の名手浅利与一
特集　幼稚園、保育園、認定こども園への新規入園の手続きについて

掛け軸に描かれた浅利与一（左）と
シルクの里公園にあるブロンズ像の浅利与一（右）
（関連２～７ページ）

～浅利与一没後800年記念特集～

甲斐の国の伝説 弓の名手 浅利与一

寶弓寺殿一箭存譽大居士　浅利與市義成
承久三辛巳年　九月七日　行年七十三

右記は法久寺（高部地区）に伝わる位牌に刻まれた文字です。寶弓寺は、現在の「法久寺」、與市は「与一」のことで、承久三年（1221年）つまり今からちょうど800年前の9月7日に浅利与一が73歳で亡くなったことがわかります。平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての激動の時代を生き抜き、伝説となった与一ですが、私たちはそんな与一の活躍をどれほど知っているでしょうか？

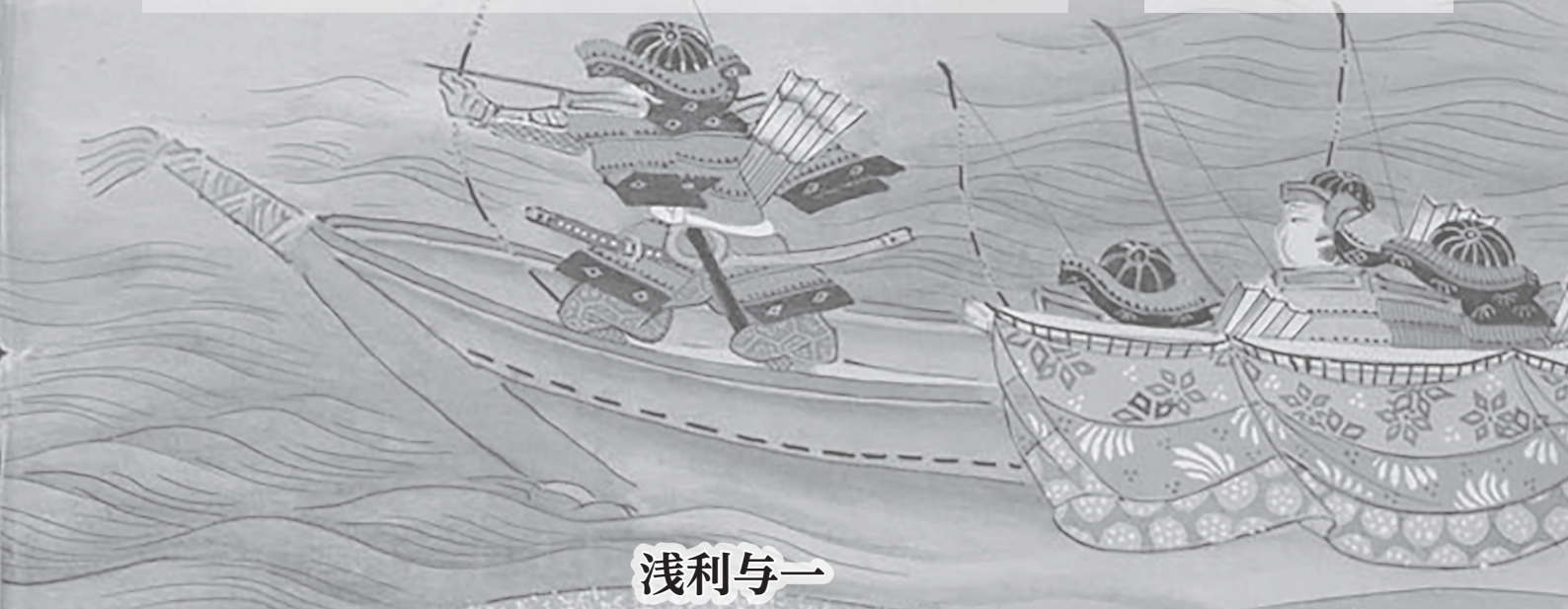
弓の名手ということは多くの人がご存じかもしれませんが、那須与一と勘違いしている人も残念ながら多いようです。いつ、どこで、どのように活躍したの？本当に中央市にいたの？没後800年の記念の年に、改めて与一の活躍と市内に残された与一の足跡を振り返ります。

デビューはあの物語

与一が初めて歴史の舞台に登場し、その名を全国に広めたのが「平家物語」です。舞台は、元暦2年（1185年）3月24日の山口県下関市壇ノ浦。正午頃から源平合わせて千数百艘が、海戦を繰り広げる中、物語のクライマックスに与一が登場します。平家有利に進んだ戦況をひっくり返すきっかけとなるような活躍をしたと記されています。

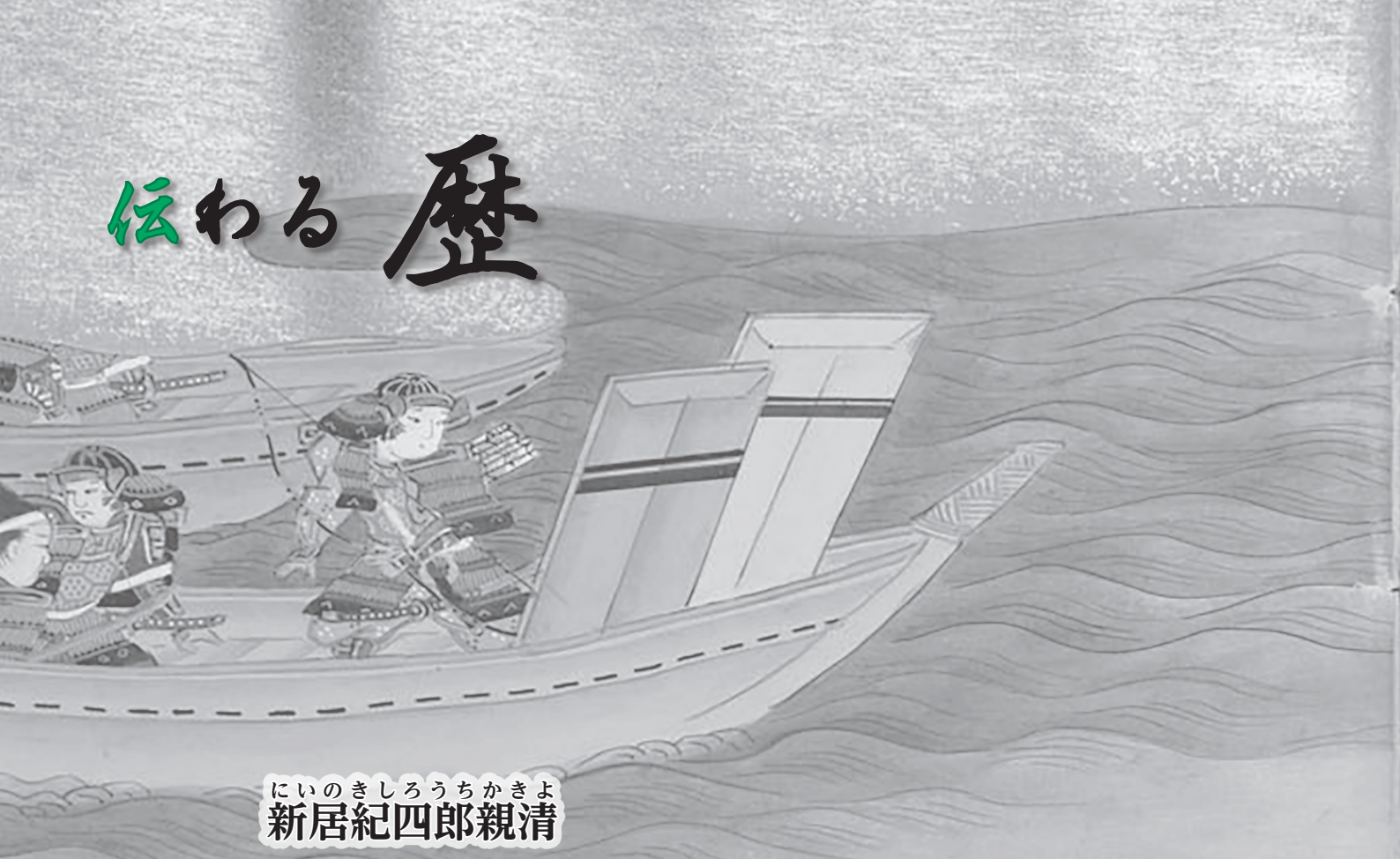
▼巻十一　遠矢

源氏方の武将和田小太郎義盛は、弓に自信があり、三町（約330m）内外の物をはずさず命中させていました。その中でも特に遠く射た矢を平家方に向かって、「その矢を返していただこう」と叫びました。新中納言知盛がこれを取り寄せて見ると、十三束二伏（約108cm）あり、「和田小太郎平義盛」と漆で書いてあります。遠矢を射る兵は少なかったようですが、伊代国（愛媛県）出身の新居紀四郎親清にこの矢を射返させる



「奈良絵本 平家物語 巻十一 遠矢」
明星大学所蔵

伝わる歴



新居紀四郎親清（にいのきしろうちかきよ）

と、三町余の距離をつっと射通して、和田小太郎義盛の後ろに控えていた三浦石左近太郎の左肘に突き刺さりました。三浦の人たちはこれを見て、「和田小太郎が自分以上に遠矢を射る者はいないと思って、恥をかいたぞ。あれをみろ」と笑いました。今度は、判官（源義経）の乗っていた船に、新居紀四郎親清が沖から矢を射て、和田のように、「こちらへ頂戴しよう」と言いました。十四束三伏（約118㎝）ある矢には、「伊代国の住人、新居紀四郎親清」と書きつけてあります。判官は後藤兵衛実基を呼んで、「この矢を射返せる者がいないか」と聞くと、実基は「甲斐源氏の阿佐里（浅利）与一殿こそ強弓の精兵でおられます」と推薦しました。判官が浅利与一に「沖からこの矢を射て来ましたが、射返してみろと差し招いています。貴殿がしてくださるだろうか」と言うと、与一は、「どんな矢か見ましょう」といって確かめ、「これは矢竹が少し弱うございます。矢のたけも短うございます。私の矢で射返してみましょう」といって、塗籠籐（漆塗り）の九尺（約270㎝）ばかりある弓に、漆塗りの矢に黒ぼろの羽（鳥の両翼の下にある黒い羽）で矧いだ矢で、自分の大きな手で握って十五束（約120㎝）あるのを、つがえて、十分引きしぼってひゅうっと射放しました。四町（約440m）余の距離をつっと射通して、平家の大船の船首に立っていた新居紀四郎親清の胴のまん中を、ひゅうふっと射て、船底へまっさかさまに射倒しました。

浅利与一はもともと強弓を射る腕きき**で知られていて、二町（約220m）先を走る鹿も射はずさなかったという噂です。**

※「新編日本古典文学全集46 平家物語」の現代語訳を要約・簡易な表現にしたものです。

この後、四国・九州の武士たちは、次々に平家を背いて源氏に付き、源氏と平家の戦いも終わりが見えました。

「遠矢」から見える与一の解説！

右記の「遠矢」の中には、与一を知ることができる表現がいくつか描かれています。

まず、与一の弓ですが、九尺もあり（標準は七尺三寸）登場人物の誰よりも長いものでした。しかも、この大きな弓を引いて四町先の敵を射倒し、さらに走る鹿も外したことがないという強弓伝説まで紹介されています。平家物語の作者は、与一を相当な弓の達人と認識していたようです。

また、与一の身分についても決して低くなかったことがわかります。後藤実基が与一を推薦した際に「阿佐里与一殿」と呼び、源氏軍の総大将であった源義経も与一に矢を射返させる際に「貴殿がしてくださるだろうか」と敬語で話しているのです。義経26歳、与一37歳という年齢差もあるでしょうが、与一が名門甲斐源氏の一族であったことが理由と思われます。

物語自体、有力者和田義盛が完全に与一の引き立て役になっています。我らが与一、源氏の中でもなかなかの人物だったようです。

姥神さま（うばがみさま）

与一が誤って射てしまった老婆を祀った石祠。かつては笛吹川沿いの工業団地内に祀られていたそうですが、現在は一町畑の諏訪神社裏に移されています。

法久寺

法久寺はもともと「宝弓寺」と呼ばれ、与一の没年が記された位牌が祀られてきました。山門脇の山腹には与一の墓と伝わる墓石が祀られています。

与一館跡

「甲斐国志」には「七倉」に与一の館跡があると記されています。浅利の小字七蔵の山腹に平坦地があり、与一館跡と推定されていますが詳細は明らかになっていません。

与一層塔

与一の墓と伝わる層塔は、高さが約315cmもあり、両側には浅利氏一族の墓とされる五輪塔が並びます。甲斐源氏の墓の中でも最大規模で、与一の力を伝えています。

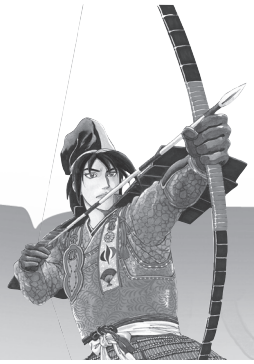
大福寺

大福寺には、平安時代から鎌倉時代にかけての仏像が複数残されており、いずれも与一と同時代か古いものであるため、与一が実際に拝んだ仏像群かもしれません。薬師如来坐像は坐像として、秘仏の聖観音立像は立像として、山梨県内最大の巨像です。

※仏像群については、今月の「歴史が真ん中」でも紹介しています。

大福寺薬師如来坐像

伝わる跡



与一が治めたとされる浅利郷は、「大塚・浅利・高部・大鳥居・木原・関原ノ諸村ナリ九一色ノ三帳・高萩・折門・垈・中山・畑熊・巨摩郡ノ花輪・一町畑・大田和等之ニ属スト云フ」と「甲斐国志」に説明があります。江戸時代後半の記録なので、いつまで遡るかはわかりませんが、与一の影響は、旧豊富村を中心に旧玉穂・田富町域までおよんでいたと考えられます。また、与一にまつわる史跡や伝説も同様の範囲に伝わっています。

没後800年と同時に市制施行15周年でもある今年に、改めて浅利与一を知ることは、玉穂・田富・豊富地区が合併してできた中央市の歴史を知ることにもつながります。

恵日山大聖院

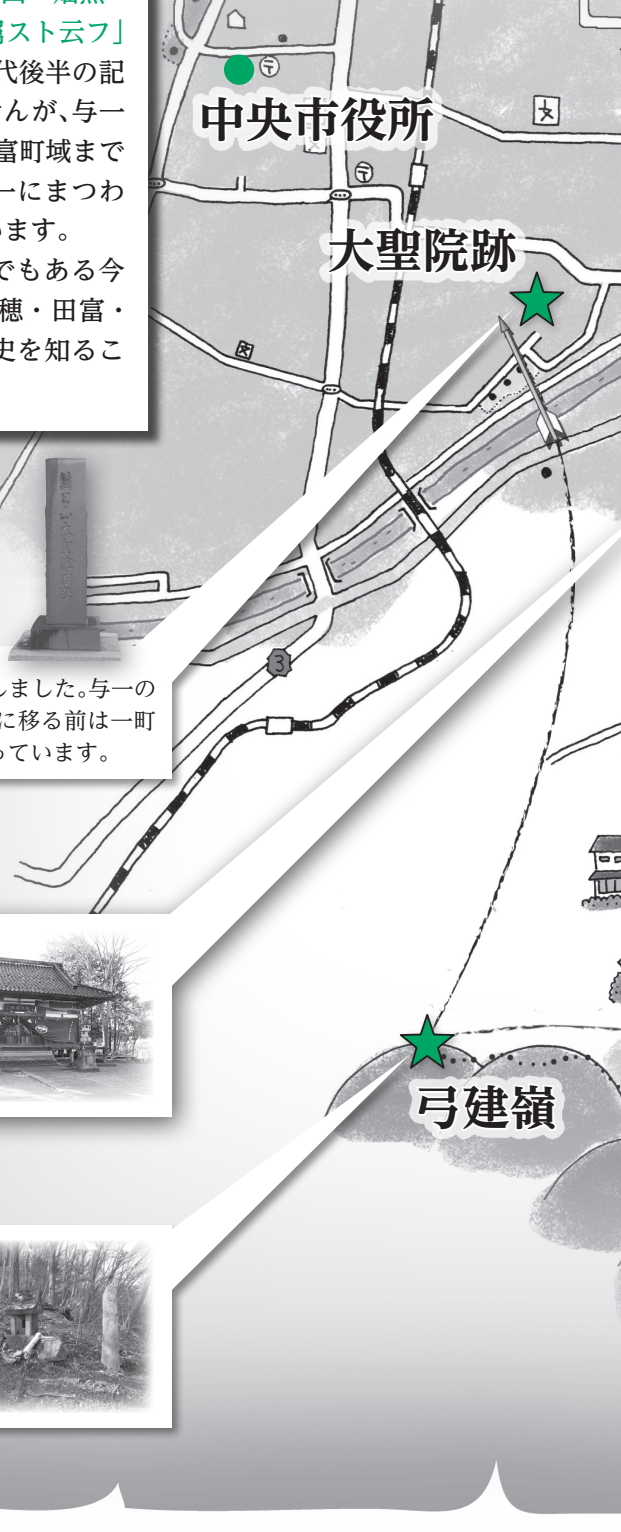
与一により開創された時は、山号を浅利山と称しました。与一の位牌が伝わる三寺院の一つで、現在地の東花輪に移る前は一町畑にあり、そこには大聖院旧跡を示す石碑が立っています。

諏訪神社

浅利の諏訪神社には与一が寄進したという、矢の根石、桃形水盤、船石と呼ばれる石造物が残されています。境内には、弓道場が併設されています。

弓建嶺（ゆみだてみね）

与一が一町畑の白サギにむけて矢を射ったのがこの辺りといわれ弓建嶺と呼ばれています。今でも毎年、大鳥居地区の人々がお参りをしています。



伝える人

与一を未来へ

与一を「過去」から「現代（いま）」、そして「未来」へ伝えるのは、与一が好きな人たちの思いです。今回、思いを集めようといろいろな人から話しを聞いたところ、与一が繋いでくれたのか不思議な縁で各地から多くの声が届きました。

「与一を深く知りたい思い」「与一を広く知ってもらいたい思い」「与一から授かったものを守り伝えたい思い」など、思いはさまざまですが、伝えるみなさんがいるかぎり、与一は未来へ伝わります。

秋田、新潟、大分、北から南まで与一の縁が距離を越えて人を結んでくれました。集まったみなさんの「思い」を紹介します。

玉穂西部児童館のみなさん

夏休みの共同制作の取り組みで浅利与一のちぎり絵をつくりました。与一のことは、学校の授業や、コミュニティバスで知っていて、多数決でつくろうということになりました。今年で与一が亡くなって800年ということは知らなかったけど、かっこいい与一ができたと思います。

板額会のみなさん

浅利与一の妻にして百発百中の弓の名手「板額御前（はんがくごぜん）」をＰＲするため、生誕、奮戦の地である新潟県胎内市で活動をしている板額会です。与一没後800年の今日までご縁が続いていることを会員一同、大変嬉しく思います。中央市で幸せな余生を送った板額同様、今後とも末永いお付き合いのほどよろしくお願いします。

山本貴子 さん
（竹林堂・不二家）

バスにラッピングされている与一を見て、すごくかっこいいし、お饅頭にすればみんなに親しみを持ってもらえるにちがいないと思い、「与一饅頭」をつくりました。与一と一緒にお饅頭も中央市の名物になってくれればいいなと思います。

浅利妙峰 さん
（大分県 糀屋本店）

弓の名手、浅利与一の活躍は平家物語にも描かれていて、私たち浅利一族の誇りです。また、その伴侶の板額御前も吾妻鏡（あづまかがみ）に勇ましい武将と描かれています。国のため、人々のために命をかけたご先祖様がいて、今の私たちがあることに深く感謝し、私たち子孫も世のため、人のために尽くし、世界を平和に導く人生を目指します。

浅利政敏 さん
（秋田浅利会事務局長）

遠い秋田の地で繁栄した私たちの先祖である浅利氏の原点は、甲斐浅利与一にあります。

また、秋田県だけではなく、愛媛県伊予大三島社にも浅利与一により奉納された箙（えびら）（矢を入れて腰につける道具）が伝わっているなど、800年前に亡くなった与一の面影は今も生きています。

浅利与一は、研究すればするほどわからないことが出てくる非常に興味深い武将です。同時代に活躍した与一の本拠地との交流などを含めた研究を進めて、多くのみなさんに「中央市の浅利与一」として広く知ってもらいたいです。

中央市歴史文化
ボランティアの会のみなさん

若尾光裕 さん
（大福寺住職）

大福寺は、浅利与一から寺領が寄進され、伽藍（がらん）も修復されたと伝わる与一とは深い縁のある寺院です。現在修理中の木造薬師如来坐像をはじめ、与一が活躍した時代から伝わる仏像も数多くあり、この貴重な宝物をみなさんと共に未来永劫にわたって護っていきたいと思っています。

与一ゆかりの大福寺は貴重な仏像の県内有数集中地です。また与一の層塔は県内最古の石造物で、甲斐源氏の先祖供養塔と指摘されており、浅利氏は甲斐源氏の中で重要な位置を占めていたと考えられます。豊富郷土資料館では、これからも浅利氏を取り上げていきます。

内藤和久 さん
（豊富郷土資料館館長）

扇屋文雀（井上文男） さん
（街道芸人）

私は大月市在住ですが、大月市にも浅利という地区があり、浅利与一にはずっと親近感がありました。

与一は、大月市と中央市の橋渡しになる人物です。私の講談をきっかけに多くの人に与一のことを知ってもらえればと思います。

伝える祭

与一を感じる60日

中央市教育委員会と豊富郷土資料館では、10月から11月にかけて「浅利与一没後800年記念祭」として与一を感じる事業を開催します。与一を知っている人も知らない人も、那須の与一と勘違いしている人ももちろん歓迎です。楽しく、正しく浅利与一を知りましょう！

⬇申込み・問合せ
生涯教育課　☎274－8522
豊富郷土資料館　☎269－3399

10月

9日（土） パネルディスカッション 甲斐源氏浅利氏館はここだ!?

浅利氏館の所在地をめぐって、プレゼン勝負を行います。最後は参加者の投票で、所在地を勝手に決定します♪

時間　午後1時30分～
場所　豊富郷土資料館
定員　25人（先着）
申込期限　10月8日（金）まで
➡申込み・問合せ　豊富郷土資料館

16日（土） 散策会 浅利氏館？を歩こう

浅利氏館候補地を歩いて、与一の存在を感じましょう。

時間　午前9時～
場所　館候補地（豊富地区）
定員　15人（先着）
申込期間　10月1日（金）～12日（火）
➡申込み・問合せ　豊富郷土資料館

11月

7日（日） こどもまつり わんぱく与一まつり

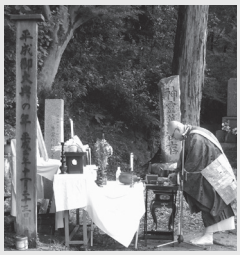
シルクの里公園エリア全体を使って、クイズラリー、ワークショップ、軽スポーツなど子どもも大人も一緒に楽しみながら与一を好きになるお祭りです。手作り甲冑（かっちゅう）の子ども武者行列「与一隊」も出陣します。

時間　午前9時30分～
場所　シルクの里公園
➡問合せ　豊富郷土資料館

24日（日） 式典 浅利与一公顕彰式典

浅利与一墓所前で行われる式典です。

時間　午前10時～
場所　浅利与一墓所
➡問合せ　生涯教育課



14日（日） 仏像搬入作業特別公開 おかえりお薬師さん

令和元年7月に修理のために東京へ送り出したお薬師さんが、修理を終えて2年4か月ぶりに故郷に帰ってきます。

大福寺に新築された文化財保存庫への搬入の作業を公開します。見違えた姿のお薬師さんは必見です。

時間　**組み立て作業開始**　午前9時～
公開終了　午後4時30分まで
場所　大福寺
➡問合せ　生涯教育課

28日（日） 木造薬師如来坐像保存修理完了記念講演会「大福寺の諸尊像」

保存修理がどのように行われたのか、修理担当しか知りえない作業の様子や、大福寺に納められている平安仏像の歴史的価値を専門家がわかりやすく解説します。

時間　午後1時30分～
場所　豊富郷土資料館
講師　鈴木 麻里子 氏（中央市文化財保護審議会委員）
明珍 素也 氏（株式会社明古堂）
定員　25人（先着）
申込期間　11月9日（火）～26日（金）
➡申込み・問合せ　生涯教育課